

老いる街古い施設

改築や補修費 財政を圧迫

6

答えを 探す 2012 総選挙

街が年をとってゆく。

子どもは減り、学校は空き教室ばかり。古びた公民館や道路は改築や補修が必要だ。自治体の財政は苦しい。地域のきずなも薄れがち。高度成長期に人口が急増した東京郊外の都市が、どこも抱える悩みだ。

「では、どうすれば？」
東洋大学建築学科の4年生が今夏、住民と一緒にこの課題に取り組んだ。キャンパスの隣街、埼玉県鶴ヶ島市の藤縄善朗市長(60)が、授業を担当する建築家の藤村龍生さん(36)と、ツ

イッターで知り合ったのが縁だった。

市の公開情報をもとに学生たちは試算した。

人口7万の市には34の公共施設がある。多くは1970～80年代に集中してきた。補修や更新に今後50年で579億円かかるが、市の予算でまかなえそうなのは200億円ほど。思いきって施設を減らさないと

もたない。
学生の一人、長谷川陵介さん(21)は驚いた。「僕たちの子ども世代は、けっこう大変だな」

学生たちは具体的に、鶴ヶ島第二小(築43年)の改築の際、隣の南公民館(築28年)を統合し、面積も抑える建設案を考えた。

鶴ヶ島第二小の住民とワークショップを重ねる。「近

所の人が気軽に入れる工夫を」「不審者の対策も必要だ」。そんな意見を採り入れたつつ、複数の案から毎回投票で選んでもらう。

細貝光義さん(63)はマイホームを求めて76年に移り住み、リタイアした団塊世代の住人だ。コミュニティを取り戻そうと、昨年できた「地域支え合い協議会」の事務局長でもある。

「会社勤めのころは余裕もなかった。気がつくとい

00人余り。地域がどうあるべきか考えるようになりましだ」。議論に参加する住民は数十人に膨らんだ。

公共施設を減らすには、住民の反発が付きものだ。「空欄プランに参加してもらい、全過程を公開することで「縮小」という課題に

前向きなイメージを持ってもらう」。授業を持ちかけた藤村さんの問題提起だ。市はこれを参考に、公共施設のあり方や住民参加の方法を検討するという。

学生の長谷川さん。授業を機に志望を交え、鶴ヶ島市役所に就職が内定した。「学校を統廃合すれば通

「街を若いから防ぐ」各党の主な政策		
安全のために	学校や病院、住宅の耐震化 木造住宅密集地域の防火策 道路、橋、上下水道の老朽化対策	民主 国民 公明 共産 社民
	空き店舗を活用	国民 共産 社民
	中古住宅市場、中賃貸住宅の整備	国民 公明 みんな 社民 国民新 改革
住宅をどうする	コンパクトシティ	国民 社民
エコで高齢者が住みやすい街に		



鶴ヶ島市民と学生たちのワークショップ (東洋大学提供)

優先順位つける必要

中央自動車道笹子トンネルの事故が、公共事業を巡る論戦をヒートアップさせている。民主党政権が予算を減らしたことを批判し、命に直結するものを補強すると訴える自民党。必要な事業はしてゆけが、バラマキに戻してはならないと反論する民主党。防災・減災を強調する公明党……。

縮小し、劣化する街の支え方を模索する。住民、若者、自治体。これって地域だけの問題ではないはず。国政を争う政治家たちは、どう考えているんだろう。

これからは、新たにインフラを進め、まず維持・補修・更新を優先すべしと根本さんは説く。公共施設の意義や費用を精査し、優先順位をつける「施設仕分け」が必要。自治体も、「いざとなったら国が助けられる」という甘えは禁物だという。

各党ともハードやソフトで様々な政策を挙げる。高齢化時代、社会保障を破綻させないため給付と負担の議論が必要のように、「老化する街」を支える選択肢も、じっくり考えよう。

(石橋英昭)